

「幸いなるかな」

詩篇 第1篇 1節～6節  
マタイによる福音書 第5章 1節～5節  
説教 岡村 恒牧師

「幸いなるかな心の貧しき者」(文語訳 マタイ傳福音書5章3節)マタイによる福音書5章から7章にかけて、《山上の説教》と呼ばれる主イエス・キリストの言葉が記されています。この言葉は、世界中で読まれ、多くの人に力を与えてきました。

「イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかされると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。」(1～2節)人々がその地域全体から、苦しみ、悲しみ、痛みを抱えてイエスの元に集まってきたのです。当時、人間の知識や経験では治せない病気は悪霊の仕業と呼ばれました。そして神の力が働くと悪霊は退散して病が癒える。そう信じられていました。主イエスは神と等しいお方だということを皆が知るようになるために主はここで奇跡を行われました。

主イエスは私たちが抱えている不信仰な思い、悲しみ、痛み、嘆き、喜びや感謝、そう言ったものを皆ご存知です。『幸いなるかな』主イエスが最初に口にされた言葉です。詩篇の第1篇もこの同じ意味の言葉で始まります。詩篇はユダヤ人にとって、祈り、懺悔、嘆き、告白の言葉でもありました。本当の幸せとは何か、それは神の前で、心が貧しい姿で生きる人だと、詩篇第1篇は絞り出すようにして語っています。神の言葉を昼も夜も口にして生きる者は何と幸せな事か。主を褒めよと連呼する膨大な祈りの言葉である詩篇全体が、主イエスのこの言葉で完結しているかのように『幸いなるかな』そう語り始められました。

「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」(3節)この1句だけで、山上の説教全体が要約される言葉でありました。神の国が全部私たちのものだ、そう確信し、実際に手に握りしめる、それ以上の幸せはない。主イエスにしか与えることのできない本当の幸せを差し出されました。

『幸いなるかな』詩篇が語ったのは神の言葉を聴かされ、神の言葉を握りしめて生きる幸いでありました。しかし主イエスが口を開かれたとき、そこには神ご自身がおられました。山上の説教が今日まで語り伝えられているのは、言葉の1句1句がそれを聞いた人々の魂に刻み付けられたからです。遙か遠くにあると思った神の祝福が目の前に到来して、自分を捕えている。

そう知ってしまったのです。主イエスを見たら神の御心がわかる、聖書全体が繰り返しそう語ります。主イエスは全知全能でありました。偉大な力強いお方が私たちと同じ人間になり弱く小さい者として、地上を歩まれたのです。

「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。」(4節)この言葉も世の常識の反対を語ります。聖書の言葉によれば、悲しむと言うのは、終末に神の元に立つことを思うと深い悲しみに胸が引き裂かれる。そういう姿を表すようです。主イエスが捕えられた時、弟子たちは一人残らず逃げ去りました。これが私たちの現実の姿です。もし神が憐れんで聖霊を注ぎ入れて下さらないなら、空しく滅び去るほかはありませんでした。神との間に横たわる深淵を覗き込んで絶望を味わう私たちを、主は『幸いなるかな』と言われるのです。

「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。」(5節)柔和と言うのは、謙遜を表すともいわれます。本当に知恵のある者や支配者が自らを低くして謙遜することを聖書は尊びます。約束の地を受け嗣ぐと言うのは、神にこれ以上ない仕方で愛される事を言い表わしています。主イエスは、徹底して柔和なお方でした。神の子として復活し、地を受け嗣ぐ者の先頭に立たれました。やがて主イエスは地上に来られ、神の民を、ご自分の身元に引き上げ、ご自身と一緒に神の国を嗣がせてくださいます。その約束の《しるし》が洗礼です。主イエスを神の子と信じるなら『幸いなるかな』という言葉で、自分自身に向けられた宣言として聞くようになるのです。

今週、灰の水曜日を迎え、レント(受難節)に入ります。主が流してくださった血と汗が私の救いの為であったことを確認しながら歩みます。やがてイースター(復活祭)の日、主が成し遂げてくださった救いの業(わざ)が、どれほど大きなものかを一緒になって感謝し祝うために、受難節を祈りつつ歩みたいと思います。『幸いなるかな』そう語られる言葉が、主を信じる者には自分に語られている約束の宣言として響きます。聖霊なる神が信仰を与え、この宣言、この喜びの叫びを、繰り返し日常生活の中で聞かせてくださるように祈り求めましょう。

(記 説教要約奉仕者)